

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 50 回 第 11.1.10.1 節～第 11.2.2.1 節

2020 年 1 月 15 日

小 田 勝

前回の最長文節クイズですが、年が明けて、出題者の近藤泰弘先生から、1800 万語の歴史コーパスを用いた検索結果が発表されました（1 月 2 日、Twitter において）。その最大値は、近代文語文における 10 語、中古和文では 7 語とのことで、これは常識的に納得のゆく結果でした。私の“答案”は、中古和文の研究者が、中古和文の機構として破綻のない最長文節を創造するとき、どのように発想するかという一例として、お受け取りくださればと思います。

古典文における助動詞の最長接続として、あえて 6 語の接続形を作ってみました、実例が存するのは、やはり 5 語が最大でしょう。その実例を前回の補遺稿に 4 例あげたのですが、同じ句型ながら「れ-たり-ける-な-めり」の例がもう 1 例、『十訓抄』にあるのを見つけました（新全集 80 頁）。

さて、以下、補遺稿は、平常に戻って淡々と進みます。多くは類例の羅列で、決して“面白い”ものではないでしょうが、おつきあいくださいましたら幸いです。

今回は、318 頁「11.1.10.1 -さ」の続きから。用例(7)の類例、

・ もの言はぬ別れのいとど悲しきは写す姿 (=生前ノ肖像画) もかひぞなかりし (長秋草)
用例(8)の類例をあげる。

- ・ 出づるさに峰をのぼりて行く月は入る山の端や下り坂なる (為忠家後度百首)
- ・ 待ちつけてもろともにこそ帰るさの波より先に [何故] 人の立つらん (貫之集)

319 頁「11.1.10.2 -み」でも、類例を追加する。

- ・ [薪ニシヨウトシテ柿ノ木ヲ] 割りたりける、中に黒み (=黒ズンダ所) のありけるが、文字に似たりけるをあやしと思ひて (今物語 34)
- ・ 草葉の露と消えにし人々、浅茅がもとの茂かりしもの悲しみ、いも (=戦死者・刑死者ノ妻等) が嘆き深けれど (六代勝事記)

この後に、節を新設する。

11. 1. 10. 3 -め(新設)

「-め」は、形容詞の語幹に付いて、そのような程度・傾向を持つ意の名詞を作る。

- (1) 君は、塗籠の戸の細めに開きたるを、やをら押し開けて(源・賢木)
 - (2) 摺鉢山をよち登りて、暗めにぞ番場の宿には着きぬる。(春の深山路)
-

状態を表す名詞を作る接尾辞には、ほかに、「-や」(「蚕むし衾ぶすまにこ柔したやが下に」記歌謡5)、「-ら」(「あなみにくさかし賢らをすと」万344)がある。

320頁「11.2.1 内の関係の連体修飾」。用例(8)(道具格の主名詞化)の類例、

- ・花流す瀬をも見るべき三日月の割れて入りぬる山のをちかた(紀師匠曲水宴和歌)
- ・人なしし胸の乳房をほむらにて焼く墨染めの衣着よ君(拾遺1294)
- ・[枝ヤ木ノ葉ヲカキ集メテ] 酒煖めて食べける薪にこそしてんげれ(平家6・紅葉)

用例(9)(10)(因由格の主名詞化)の類例を追加する。

- ・木の葉散る嵐の風の吹くころは涙さへこそ落ちまさりけれ(新勅撰1103)

321頁用例(15)は「山高み、桜花を見つつ我が来し」という格関係であるが、

- ・竜田山見つつ越え来し桜花(万4395)

では、「桜花を見つつ、竜田山を越え来し」という格関係になろう。用例(16)の類例をあげる。

- ・いみじき誰なりといふとも、さばかり争ひ立ちて(今昔19-25)

次例の主名詞は、引用文中の「時の二格」に立つ名詞である。

- ・わが背子が「来む」と語りし夜は過ぎぬ(万2870)

同頁「11.2.2 外の関係の連体修飾」。次例のaは「内の関係」で「容貌を見たい」の意であるが、b cは「側目(=横顔)を見たい」「心ざまを見たい」のではなく、bは「横から覗いて見たい」の意、cは「世話をしたくなるような性格」の意である。

- ・ a 清らに、すべて望月のやうに、いと見まほしき容貌になむ。(うつほ・国議上)
- ・ b そこはかたなく書き乱り給へるしもぞ、いと見まほしき側目なるを(源・明石)
- ・ c いと見まほしき心ざまの、すずろに恋しく侍れば(寝覚)

用例(1)～(6)の類例、

- ・ 亡くなりたる人の西の京に住みし家に行きて見れば(恵慶集・詞書)

- ・夜更けたる月を見つつ、男懸想したり（元輔集・詞書）
- ・くれはとり（=枕詞）あやにくに降る夕立ちに濡れ濡れ晴るる蟬の聲かな（拾玉集）

用例(7)(8)の類例、

- ・幼き者どもの母みまかりにし次の年にて（隆信集・詞書）

用例(9)(10)の類例をあげる。

- ・雪の山つくられて侍りける雪を（新後撰 1218 詞書）

「明日とての日」というのは、「あることが翌日にある、その前の日」という意である。

- ・明日とての日（=翌日、女二宮ガ三条宮ニ移ル）、藤壺に上渡らせ給ひて（源・宿木）

322 頁「11.2.2.1 「～の」「～に対する」が補われる連体修飾」、用例(1)～(14)の類例をあげる。

- ・この帯刀の女親は、左大将と聞こえけむ[人ノ]御息子、右近の少将にておはしけるをなむ養ひ奉りける。（落窪）
- ・昔、東の五条に、大後の宮おはしましける[殿ノ]西の対に、住む人ありけり。（伊勢 4）

次例について、新全集は「やかましく聞こえていた砧の音をお思い出しになるだけでも」と訳しているが（189 頁）、「やかましかった[明け方の] きぬた 砧の音」だろう。

- ・耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて（源・夕顔）

「思し出づるさへ」という、その思い出している場面には、

- ・ごほごほと鳴る神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかす唐臼の音も枕上とおぼゆる、あな耳かしがましとこれにぞ思さる。…白袴の衣打つ砧の音も、かすかにに、こなたかなた聞きわたされ」（源・夕顔、新全集 156 頁）

とあって、やかましく聞こえていたのは唐臼の音である（佐伯梅友 1968 参照）。思い出しているのは、唐臼の音がやかましかった五条辺りの明け方の、「かすかに聞こえた砧の音」の方だということであろう。

[出典追加] 紀師匠曲水宴和歌②903 年（または 902 年）3 月 3 日③新編国歌大観 5／長秋草①藤原俊成（1114・1204）③新編国歌大観 7

[引用文献追加] 佐伯梅友 1968 「砧の音は聞きにくかったか」『武蔵野文学』 16